

## 事例研究の質について考える —「ちゃんとした」事例研究の条件—

柴坂寿子

1. 「事例」という言葉をどのように使っているか  
事例研究法とは何を指すのだろうか？ 武藤(1999)も指摘するように、研究領域によってそれが具体的に指すところは様々である。ここでは生活の場実際に çıkかけて研究を行うフィールドワークの範囲で考えてみたい。

筆者自身が幼稚園での観察をするとき、「事例」「事例研究」という言葉をどのように使っているか振り返ってみると、少なくとも4つの違った使い方をするようだ。

ひとつは観察に行っている幼稚園を指す場合である。筆者がある幼稚園で調べたことは、その幼稚園1園を対象にし、そこについて分かったことという意味で、「事例」である。ある日常の生活の場で起きていることを調査するフィールドワークは、成果はまずはそのフィールドに関する知見だから、必然的に事例研究となる。

第二に、ある子どもを指す場合で、例えば「A児の事例」のような場合である。第三に、ある種類の出来事を指す場合で、例えば、「仲間入り事例」といえば、他の子どもが遊んでいるときに、遊びに加わろうとする出来事を指す。筆者はあるクラスの子供達を園から卒園まで縦断的に観察している。それぞれの時点では、複数の子ども達のやりとりがあり、それが時間とともに流れていく。こうしたデータを研究としてまとめるときには、ふたつのどちらか、つまり一人の子どもを軸として「A児の事例」のようにまとめるか、

出来事の種類に注目して、同じ種類の出来事を「仲間入り事例」のようにして集め、まとめることが多い。

第四に、ひとつの具体的な出来事を指して事例という場合である。「事例1：年少時5月12日にまりこがゆりここと起こしたいざごごの事例。ままごとコーナーでゆりこがぬいぐるみの猫を持って座っていると、まりこが突然ゆりこの手からぬいぐるみをひったくった。ゆりこは…」というように記述される出来事である。これは一番の基本的な記録であり、上述のふたつのタイプの研究の基本データとなる。例えば、「A児の事例」といえば、A児の関わる様々な具体的な出来事が基礎資料になるし、「仲間入り事例」では仲間入りとして捉えられる出来事ひとつひとつが基礎データとなる。また、後述するように論文の中でこうした記述そのものを具体的に示すことも多いのである。

このように、研究対象がある特定のフィールドや個人であることから「事例」といつていることもあるし、出来事のひとかたまりを「事例」と呼んでいることもあるようだ。

### 2. 事例研究は「ちゃんとした」研究なのかという 問い

少なくとも筆者の関連するいくつかの学会では、事例研究やフィールドワーク、質的研究、定性的研究は流行っている。こうした研究方法についてのシンポジウムやワークショップが開かれ、どこも盛況のようである。このこと自体はとても喜ばしいことである。

筆者自身も幼稚園での観察事例を学会で発表していると、院生の方などから方法についての質問を受けるようになった。しかしそれはたいがい、「ちゃんとやるにはどうしたらいいんですか」、「こういうデータからどうやってちゃんとまとめるんですか」といった、どこか不安げな質問なのであった。そのたび、「『ちゃんと』って何なのだろう？『ちゃんと』と言わせてしまうのは何なのだろう？」と考えてしまった。事態は



Hisako SHIBASAKA お茶の水女子大学  
生活科学部専任講師

著者紹介〔略歴〕お茶の水女子大学理学部卒、同大学院理学研究科生物学専攻修了。理学博士（京都大学）。マックス・プランク行動生理学研究所研究員を経て現在に至る。〔専門分野〕人間行動学。〔連絡先〕〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1（勤務先）。

それほど喜ぶべきものでもないのかもしれない。

事例研究は、大量調査に基づく統計的研究、実験研究、定量的研究に比べれば、多くの研究領域で未だマイナーであることには変わりはないのだろう。統計的方法などが研究規範とされている中で、データを数値化し、多くの標本数をそろえ、統計的手法で検定に掛けることが、そしてそのことのみが、科学的、実証的で「ちゃんとした」研究であるという呪縛から抜け出すことは難しいのかもしれない。

日常での行動を扱う場合、数値化されたデータは、本来記述的な把握に基づいており、操作や手続きの加わった数的「表現」である。一つ仮想的な例を挙げたい。「保育者の方から月ごとに子どもの様子について話を聞いた。6月のインタビューでは『AちゃんとBちゃんとは今月はとてもよく遊んだ』と保育者は語った」という記述を次と比較してほしい。「保育者が、『よく遊んだ』から、『全く遊ばなかった』の間の5段階評価でA児とB児の遊びの頻度を評定した。6月の評定は5であった」。もちろん後者の数値化されたデータは便利である。「4月から翌年3月までの評定の平均値は4.5であった」等ということもできる。年少時と年長時での平均値の差の検定もできる。でも待ってほしい。もともとの、「AちゃんとBちゃんとは今月はとてもよく遊んだと保育者は語った」という記述と、「保育者による評定5」の間に何か本質的な差はあるのだろうか？ 後者の「5」が、前者の記述に比べて「実証的、科学的」で「ちゃんとしている」のだろうか？

標本数が小さいことも、事例研究が「ちゃんと」していないのではと不安にさせる原因のようだ。この点について佐藤（1992）は、対象を通して調べられる項目の数は、事例研究ではサーベイなどの調査よりも多いことを指摘し、サーベイは多くの事例について「浅く広く」調べるのに対し、事例研究は少ない数の事例について多くの事柄を把握し、「深く狭く」調べる方法だと述べている。

事例研究をしようとする人は一度は、ある程度の標本数のある、数値化したデータを統計的手法で検討する研究をやってみた方がいいのかもしれない。数値化されたデータの便利さも分かるだろうし、その操作性や裏に潜む様々な仮定、方法としての限界もまた見えてくるだろう。数値化されたデータを読み取る目もでき、それを事例研究に生かすこともできるのではないかと思う。

### 3. 筆者の考える「ちゃんとした」事例研究の条件

何が「ちゃんとした」（正当な、妥当な、よい）研究と見なされるかは研究領域や方法で大きな違いがある。このことは十分に理解されるべきであろう。市川（1999）の行ったどのような研究が「実践研究」として評価されるかの調査は、これを端的に示している。既に幾つかの学会誌に掲載された実践研究論文を、教育心理学会誌の20人の編集委員が評価した結果、評価には大きなばらつきがあることが分かった。判断の根拠から推察すると、ばらつきはかなりの割合の編集委員が、従来の調査研究、実験研究と同じような基準で実践研究を評価しているためではないかと考えられたのである。

では「事例研究としてちゃんとしている」とはどんなことなのだろうか。以下では、この点について私見を述べたい。ここでは「事例研究」としては、臨症的な問題解決を目指す研究ではなく、ある科学的な問いかけに答えようとするような研究（武藤 1999）で、フィールドワークによる研究を念頭に置いている。筆者ならこんな事例研究を評価する、あるいは筆者自身はこんな事例研究をしようと努力しているということである。

#### ① ローデータの質がよいこと

あまりにも当たり前なことかもしれない。しかし分析などに進む以前のローデータの質は一番重要である。より具体的には、対象者の行うことをなるべく正確に見聞きし、記録すること、その際対象者のすることを一続きの意味のある行為として捉えるスタンスを持ち、そのためなるべく多くの背景を押さえることを心がけたい。

あるとき幼稚園のホールで、二人の女兒がジュースやさんごっこをしていた。色水が瓶に入っていて、それをじょうごでコップに移しては飲ませてくれる。筆者がそばに座っていると、ジュースをついでいるA子がぼそっと「もも組（年少組の名）」という。筆者には何のことか分からなかったが、もう一人のB子が、筆者に「ジュースがなくなったら買って来るんだよ。教えてあげる」といって、筆者の手を取って走り出した。連れて行かれたのは廊下の反対の端にある、年少組の部屋で、そこで色水作りがされていたのである。さっきA子は「このジュースは年少組から来たんだよ」ということを言いたかったのだろう。

このように、聞いたこと見たことを大事にして記録を取っておくと、すぐは意味が分からなくても、後で

全体の意味が繋がることも多いのだ。

また、子どものすることを一続きの意味のある行為として捉えるスタンスを持たないと、A子のつぶやきはどのような意味なのだろうという疑問も生まれず、観察に不慣れた学生さんから「最初右に行って、次に左に行った。そのあとまた右に行った」というような観察レポートが出てきて、苦笑してしまうことがあるが、これは子どもは何をしようとしているのかという目で見ていないからなのだろう。

もし筆者が年少組での色水作りをホールでのジュースやさんごっこの前に見ていたら、A子の発言の意味は何の苦もなく分かったことだろう。このようにホールの子どもの行動を理解するのもそこだけ見ていられるのでは分からないこともたくさんあるのだ。周りの子ども達は何をしているのか、先から行き来している場所はいつも何が置いてある場所なのかなど、背景の知識を押さえておくこともローデータの質を高める上で重要である。

## ② トライアングレーション

いつでもできるわけではないが、一つのことに對して複数の種類のデータを取ることも心がけたいことの一つである。これは「トライアングレーション（三角測量）」と呼ばれる（Corsaro 1985；佐藤 1992）。例えば、「幼稚園でA児とB児がどれくらい遊んだか」について、保育者による記述とともに、観察によるデータを取るとか、「私、Aちゃんと一緒に誕生会の司会したもんねー」といった子どもの発言があったら、保育者にそうしたことがあったのか確認する等の作業をするのである。一種の裏付けを取る作業ともいえる。複数のデータが同じ方向を向いていれば、それだけ確実なことがいえるし、ずれが生じればそれはどうしてなのかと問う新しい視点も開ける。

## ③ 事例を分析する視点や問題設定を明確化すること

現場では多くのことが起こっている。このため、そのすべてを扱わないと嘘であるかのように思うかもしれない。実際は、すべてを扱うことは出来ないし、その必要もない。地図と現地との関係にたとえれば（佐藤 1992）、現場についての情報量が多く細かい地図は、かえって読みにくい地図になってしまうからである。どんな地図を書くのかというのが、事例を分析する視点であり、問題設定である。

事例を分析する視点や問題設定は研究を始める前に明確化してしまえることではない。現場に入って観察・

調査をしようとするときは事前には何が起こるのか分からない。そこで何が明らかになるかは、研究者が持っている問題意識と、そこで実際に何が起こっているのかの両方に関わる。

事例を分析する視点や問題設定を明らかにするには、データを何度も見直し、自分が現場で感じたことや考えたこと、今データを見て感じることを意識化し、言語化する必要がある。ときには、わざと暫くデータを見ずに置き、暫くしてまた読み直してみることも有効だ（cp. 原 1993）。箕浦（1999）が繰り返し指摘するように、この過程が研究で一番難しく、時間もかかる。筆者が学会で受けた質問が不安げだったのも実はこのためだったのかもしれない。不安なのは無理もない。何が出てくるのかまだ分からないのだから、でもこればかりは本人が発見するしかないし、本人しか発見できないことである。いったん事例を分析する視点や問題設定がはっきりすると研究がおもしろくなってくるし、この過程を経た研究が読者として読んでもおもしろい研究なのである。

## ④ 事例を相対化し、位置づけること

事例研究を通して明らかになったことは大切な一つの事実であるが、多くの事実のうちの一つに過ぎないことも確かである。ここで、自分の研究の限界を明らかにした上で、相対化し、全体の構図の中に位置づけることが必要になってくる。

具体的にはどのような作業をすればよいのだろうか。ひとつは、結果に関連すると思われる属性に関して、その事例の持つ具体的属性を明らかにし、考察において相対化と全体の展望を行うことである。例えば、筆者はある園で、入園後の幼児の家庭での交友範囲が次第にクラスメート中心になってくる傾向を報告したことがある。この園は徒歩通園であり、園児達が家庭で行き来することも簡単であったと考えられる。バス通園で、互いの行き来が簡単でない園では、また違った結果になるかもしれないことは当然考えられる。

こうした相対化を行う際重要なのは、事例の持つ様々な属性の中から、結果に直接関連すると思われる属性を見極めることである。例えば、例に挙げた幼稚園は徒歩通園である他にも、所在地は東京である、公立園である、お弁当持参である等の特徴を持つ。ここで東京の幼稚園であるから、他の道府県ではどうかといった相対化を行ったとしても、園の所在地がどのように交友関係に影響するのか分かりにくいから、あまり有効な相対化とは思えない。より直接的な属性について

考察した方が確実であろう。

自分のフィールドしか知らないと相対的に考えること自体が難しいかもしれない。自分の入る現場以外にも、いろいろなフィールドを一度見ておくことも相対化の助けになるだろう。

もう一つは、実際に他の事例との比較を行うことである。先行研究で直接比較可能な事例があれば、それと比較して考察できるだろう。比較可能な先行研究がない場合には、将来的に自分自身で事例を重ねていくことが確実な相対化の道だろう。現時点での報告の中では、こうした将来への展望を示すことで相対化するのである。その際理論的サンプリング (Glaser and Strauss 1967) の考えが助けになる。次に何と比較すればよいか考えて次の研究対象を決めるのである。例えば、トラブルの多い子の事例を報告したら、次はトラブルの少ない子の事例を取り上げ比較してみることで、何がこの差を生むのか明らかにすることが考えられる。

#### ⑤ 領域内にとどまらない視野

個々の事例研究やその報告の中で具現化するのには難しいかもしれないが、筆者自身は大切だと思っていることがひとつある。ある子どもの事例はその子どもの事例であり、ある幼稚園の事例はその幼稚園の事例であり、保育の現場の研究は保育の現場の研究なのだが、そうしたことを越えた広い視野で研究を考えるスタンスである。

例えば、他領域での研究や概念がその子どもを理解するヒントになるかもしれない。保育での研究が他の分野への提言になるかもしれない。そういう可能性を頭の隅に入れておくことである。現場を別領域の言葉でかっこよく語って得意になるとか、大風呂敷を広げたような考察をすとかいうことではなく、保育の場合で言えば、子どものすることを人間の営みのひとつと考えるということである。

#### ⑥ 読者に納得してもらえようデータの提示をすること

事例研究をまとめるときに気を付けなくてはいけないのは、読者に分かるように、納得してもらえようデータを示して書くということだ。これも当たり前前に聞こえると思うが、事例研究ではかなり意識して行う必要がある。

その理由の一つは、研究者は出来事理解・解釈に背景の知識を無意識的にも意識的にも使っているからである。先ほどのジュースやさんごっこ例でいえば、

A子の「もも組」という発言から、一足飛びに「この色水は年少組から来たんだよ」という解釈を示したのでは、読者にはなぜそう解釈されるのか分からない。年少組がもも組という名前であること、年少組で色水作りが行われていることという、解釈の根拠を読者に示すことが重要になってくる。

もう一つの理由は、現場で調査していると、あることを知っていることが当たり前になってしまい、どのようにしてそれを知ったのかを読者に知らせることに無頓着になりがちだからである。「A児とB児が6月にはよく遊んだ」という記述をするなら、それは観察記録に基づくのか、保育者が語ってくれたことに基づくのか、情報源をきちんと示すことが必要になってくる。どのようにしてそれを知ったのか自分自身でも曖昧になってしまうこともあるから、読者を想定して書くことが、結局自分にとっての確認にもなる。

具体的な出来事事例を示すのも、読者にローデータに近いものを自分で吟味してもらうという点で有効な方法である。ただこれもローデータをそのまま出せばよいのではない。表現の仕方を工夫しないと、かえって読者には分からなくなってしまう。例えば、一つの遊びグループ内で仲間入りといざこざが同時進行で起こっているというようなことはしばしばある。今いざこざを扱っているなら、仲間入りの部分は省いて記述するか、その事例ではなく、もっと単純な構造の事例を選んで提示するといった工夫も必要になる。また、「A児が『…』と言った。B児が『…』と言った」等と書くのではなく、「A児が『…』と尋ねると、B児が『…』と答えた」のように、表現を工夫することも必要だろう。ローデータをいかに本質を崩さず、分かりやすいように加工して提示するかが工夫のしどころである。

事例研究というと、数値を出してはいけないかのように思う人もいるようだが、数値を示した方が分かりやすいデータは数値を示せばよいし、出すべきだと思う。簡単な例でいえば、園児の総数はどれくらいか、男女比はどうか等の基礎データが数値で示されれば、読者は園で起こりそうなことをある程度想定しながら研究を読みとっていくことができるだろう。

#### ⑦ 視点に沿って論理性を貫くこと

事例研究で陥りがちなのは、いざまとめて報告を書こうとすると、現場の複雑さに引き戻され、論理的構成が保てないことである。自分が見出した分析の視点を意識し、それに見合った先行研究、考察を配置して、

論理的なつながりを持った報告を書こうと意識することが、事例研究では特に必要だと思う。

#### 4. 研究協力者の方達との関係について

研究に協力して下さる方達への感謝と配慮は研究方法に限らず欠かせないが、現場での研究はその方達の日常に入り込んでいくため、特に意識しなければならないことである。こうした研究協力者の方達との関係も筆者にとっては「ちゃんとした」事例研究の条件である。どうすればじゃまにならずその場にいられるのか、多少なりとも現場に貢献できるとすればそれはどのようなことなのか、プライバシーに配慮した研究成果の報告のやり方など、自分で考えることも重要だが、協力者の方達とよく話し合っていくことも大切である。現場により考え方が違っていたり、求められることも変わってくることも多いからである。また自分が実際に何ができるかの制限も当然あるからである。

#### 5. 家政学にもっと事例研究を

家政学が生活する人間の日常の営みを対象にする領域なら、まさにその生活する場所に向き、そこでの人の営みそのものを一つ一つ、具体的に直に見つめる

作業は最も基本的な作業ではないだろうか。まだ「未開」の、多くの要因が複雑に錯綜するような場を「開墾」し（箕浦 1999）、問題を発見するような方法は、家政学でこそ大きな意味を持つのではないかと筆者は考えている。学会大会や家政学会誌上で事例研究によって多くの問題提起がされることを楽しみにしたい。

#### 引用文献

- Corsaro, W. A. (1985) *Friendship and Peer Culture in the Early Years*, Ablex, New Jersey
- Glaser, B. G., and Strauss, A. L. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Aldine Publishing Co., Chicago (後藤 隆, 大出春江, 水野節夫 (訳) (1996) 『データ対話型理論の発見』, 新曜社, 東京)
- 原ひろ子 (1993) 『観る・集める・考える』, カタツムリ社, 東京
- 市川伸一 (1999) 「実践研究」とはどのような論文をさすのか, 教育心理学年報, **38**, 180-187
- 箕浦康子 (1999) 『フィールドワークの技法と実際』, ミネルヴァ書房, 京都
- 武藤安子 (1999) 事例研究法をめぐって1: 事例研究法とはなにか, 家政誌, **50**, 541-545
- 佐藤郁哉 (1992) 『フィールドワーク』, 新曜社, 東京